縮小社会研究会 第５回総会 研究会報告 2017/3/11

縮小社会における人間の心と西洋思想

―認識論の変革が意識を変える―

西洋の合理主義と科学技術は、資本主義的経済発展の中で、どのようにして現代社会のグローバルな諸問題を生み出したか？ また、進行しつつある縮小社会の危機と混乱をどのように克服していくか？

人間存在研究所　　山田　武

内容項目

はじめに　問題意識
１）人間の心とは何か―心の構造
２）言語と思考と知識―認識論の革新
３）西洋思想上の心の分析
４）社会契約説と個人主義
５）経済学における道徳性の欠如
６）現代社会の諸問題と縮小社会
７）世界連邦と日本国憲法の改正
８）おわりに　社会の縮小と人間の成長

はじめに　移行期の危機状況の根源・現象・解決−1

①拡大社会への発展（産業資本主義の成立）

・言語を持つ人間の拡大志向―農耕牧畜・余剰生産・私有制・戦争
・近代西洋文明の加速度的拡大―産業革命・科学技術の発達
・拡大社会の特徴：資本主義的発展、浪費の奨励、利己的個人主義

②拡大社会の飽和と限界（世界経済持続性の危機）

・人類の地球的一体化―西洋文明の世界拡大と戦争・支配
・資源エネルギーの地球的限界、地球温暖化と環境の激変
・気候変動と農業・食糧危機、人口減少、格差（地域・民族・階級）の拡大

③縮小社会の必然と混乱（文明と価値観の転換時代）

・化石資源の減少、資源の偏在、人心の不安、刹那主義、享楽主義
・地球の限界と物質文明の過剰発展⇒人間の欲望の調整・道徳的抑制
・利己的資本主義の利潤追求は限界⇒互助互恵・共存共栄・格差是正

移行期の危機状況の根源・現象・解決−2

④文明の再建と混乱防止（西洋思想の限界の克服）

・検証可能な科学的知識による普遍的人間観の確立⇒心の構造の解明

・西洋的合理的発展思想の限界と世界連邦の建設⇒永遠平和の確立
・道徳的抑制―人権と民主主義、互恵互助、情報の透明性⇒正義の再建
・物質的豊かさの限界と精神的貧困の克服⇒イデオロギーの創造へ

⑤西洋思想の根源と限界（ロゴス構造から創造へ）

・アリストテレス(BC384−322)

「すべての人間は、生まれつき、知ることを欲する。・・・というのは、感覚は、その効用をぬきにしても、すでに感覚することそれ自らのゆえにさえ愛好されるものだからである。」（『形而上学』出隆 訳）

・ ニーチェ(1844−1900)

「世界は私たちには論理的なものと見える。というのは、私たちがまずもって世界を論理化しておいたからである。」(『権力への意志』原佑 訳)

・政治経済学の革新（ロゴスを「知る」から主体的・創造的に「生きる」へ）
⇒人権思想と社会契約、自由放任と市場経済の限界⇒社会的責任 SR を普遍的意識に

１）人間の心とは何か―心の構造

① 問題の所在

・心（精神・意識・魂）についての定説はない。
・西洋思想上の心は、神の被造物 としての心、人間は受動的存在
・古来の心は、肉体と対立し永遠不滅 （観念論）をめざしてきた。
・哲学的心は、観念論・実念論と唯物論・唯名論の認識・普遍論争を招く。
・哲学的認識論：真理の認識の根拠は何か。言語論の忌避
・無意識の発見 ：欲望と感情が無意識の神経症的反応（ﾌﾛｲﾄ）
・言語の役割 ：対象の記号化・思考・創造と意味づけ・自己統制
・心の三要素 ：欲望・感情・言語（思考）＜欲・情・言＞
○ 理性（言語・意識）的思考は、無意識の欲望・感情をどのように理解しコントロール（意味づけ・合理化）しようとしたか？ ⇒人間は自他を欺き、世界を誤解し、他者を威圧し従えてきた。
（真理［知識］探求・発見の歴史は、偏見克服・誤解更新の歴史であった。）

② 人間の「心と言葉」を知る意義

a. 人間は欲の塊（ｶﾀﾏﾘ）、感情の動物――それを言葉でひねくり回し、人生の意味づけをしながら生きています。
b. まず人間の行動の源となる「心のしくみと働き」について考え、その上で、心を癒したり強くする方法や、社会との関わり方についての提案をします。
c. 人間の心を知ることによって相互理解が進み、過剰な欲望や競争を抑制し、社会の平和共存・互恵互助と個人の幸福・平安を促します。

d. 神の本質がロゴス(『ヨハネ福音書』)とすれば、人間を意味づけ合理化する言葉が神の本質になります。

③ 生命言語説とは何か(生命にとっての言語とは？)

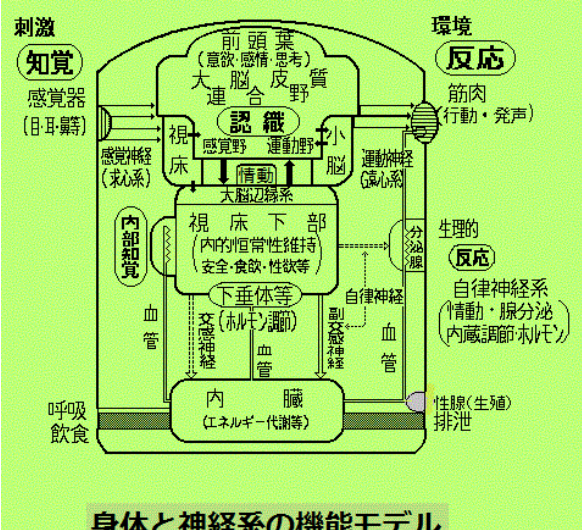
a. 不安定な存在である生命は、複雑な環境(刺激・情報)の変化を認知・学習して、個体と環境とのバランスをとりながら適応・生存している。

b. 言語は、個体にとっての対象(自然的・創造的環境、名詞 what)とその状態(動詞・形容詞 how 等)を、刺激(対象)反応性にもとづいて音声信号化し、対象の情報と自己の判断を他者へ伝達するものである。⇒言語的認識論

c. 人間は、言語(音声信号)によって世界を理解・再構成し、その知的判断によって欲求を創造・拡大し、また自らの人生を意味づけ、意志的にコントロールしながら生きています。では何をめざすか？
幸福な人生を　・・・。

まずは検証可能な事実から・・・・・・・

④ 神経系による心と体の統合
——言語的思考を組み込む基板——



身体と神経系の機能モデル

⑤ 心の三要素

人は、心でもとめ　目でみつめ　耳できき　肌でふれあい心で感じます。

そして、言葉で考え、欲求と感情を調整し、自分の意思と情報を伝えます。心には、求める心、感じる心、考え操り語る心があります。それらが心の三要素——欲求・感情・言葉なのです。

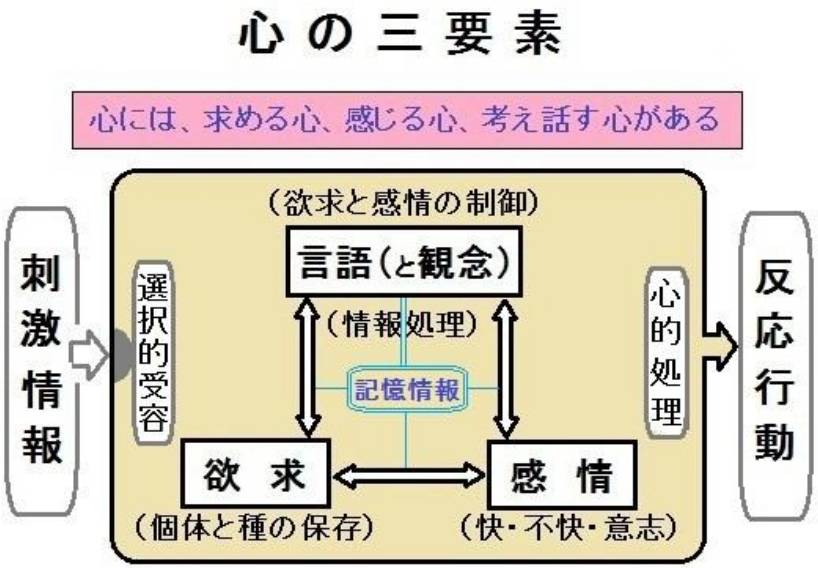
2)言語と思考と知識—認識論の革新

○ はじめに⇒知るとは何か？　知識とは何か？

☆人間の認識は生物学的・言語的起源を持つ

・アリストテレス(BC384-322)　:ギリシア哲学の大成、万学の祖

「すべての人間は、生まれつき、知ることを欲する。・・・というのは、感覚は、その効用をぬきにしても、すでに感覚することそれ自らのゆえにさえ愛好されるものだからである。」(『形而上学』出隆　訳)



・ベーコン(1561-1626)　:イギリス経験論・功利主義の祖

「人間の知識と力は一致する」(『新機関』服部栄二郎訳)

・カント　(1724-1804　):ドイツ観念論、論理・思考枠(ｶﾃｺﾞﾘ)　の限定

「数学的命題[知識]は、常にア・プリオリ[純粋・超越的]な判断であり経験的な判断ではない。」(『純粋理性批判』篠原英雄　訳)

・ニーチェ(1844-1900)　:ドイツの哲学者、実存主義、生の哲学

「目標が欠けている。『何のために[認識するのか]？』に対する答[知識]が欠けている。」(『権力への意志』原佑　訳)

○思考と言語の役割と原則

◇思考とは

思考とは、環境に対する直接的刺激反応性(反射的行動)を抑制し，今まで学習し蓄積した行動様式や学習情報を駆使して、最適の行動を選択・洞察・創造することである。つまり、思考とは、個体が当面する問題状況の情報を収集し、その問題状況を解決するための中枢神経における情報処理過程である。このような意味での思考は，人間でなくとも高等動物例えばチンパンジーでも可能である。

◇言語的思考の原則

生命にとっての認識と思考の基本は、複雑な環境(刺激・対象)の的確な把握であり、

人間においては言語を用いて「対象 what とその状態 how」の情報を認識・判断し、生存のための行動を選択することである。その思考の過程と結果は、文法的に的確に表現しなければならない。

つまり、「対象とその状態」は、主語（対象）と述語（状態）の文法形式として表され、対象間の関係や詳細な状態は、目的語や修飾語、助詞等として表現される。つまり、言語表現とは、対象の状態や関係性についての「疑問」を明確にする思考過程に他ならないのである。

3）西洋思想上の心の分析

①「心の三要素」の捉え方の誤り

・人間は欲の塊、感情の動物――それを言葉で意味づけ（合理化し）ながら生きている。⇔西洋的な言葉・ロゴス優先の失敗（「知情意」ではなく「欲情言」が正しい）

② 理性主義・論理主義・ロゴス中心主義

・「始めにロゴス（言葉）ありき。・・・ロゴス（言葉）は神なりき。」（『ヨハネ福音書』）

・「世界は私たちには論理的なものと見える。というのは、私たちがまずもって世界を論理化しておいたからである。」（『権力への意志』原佑　訳）⇒科学の根源は世界の論理化にある。

③無意識的な欲望・感情の抑圧と神経症的暴発

・創造神と自然発展法思想による「抑圧性」⇒暴発・革命・利己主義

・ルネサンス・ヒューマニズム⇒宗教改革・戦争、営利欲の解放

・無意識の発見・重視（フロイト）⇒意識化・認知化の失敗、心に闇が残る

○哲学・心理学における「心」の捉え方

プラトン（BC427~BC327）：観念論・イデア論、魂の三分説（理知、気概、欲望）、愛知とはイデア・魂の想起

アリストテレス（BC384~BC322）：経験的観念論、心の追求すべき智恵（言葉）は、それ自らのためにある

アウグスティヌス（354~430）：キリスト教神学、人間が心に神を求めるとき（自由意志）、「神の国」が現れる

デカルト（1596~1650）：合理主義的観念論、考えることによって成立する私が精神的実体（心）、心身二元論

ロック（1632~1704）：経験論、心は白紙（生得観念否定）、性善説、自由主義的功利主義の祖

アダム・スミス（1723~1790）：心の裁判官、同情・共感の感情と義務の感覚があれば自由放任が最善

カント（1724~1804）：心は意識、アプリオリな感性と悟性と理性による思考の形式 、理性の限界と絶対化

否＜思考は言語による疑問解明の形式（what, how, why ）、カテゴリーはその一部。理性は感性に依存＞

マルクス（1818~1883）：唯物論、意識（心）は社会的存在として規定（受動的に）されている（社会的決定論）。

否＜人間は意識的存在、言語は単に意識伝達の手段ではない。主体的意識の軽視＞

フロイト（1856~1939）：精神分析、神経症・無意識の心理学、意識・自我による無意識の抑圧

否＜意識と言語の関係、無意識と欲求・感情との関係が不明確。精神分析は自律を疎外＞

ジェームス，W（1842~1910 ）：プラグマティスト、神経生理学的心理学、意識の流れ、感情と身体反応

ワトソン，J（1878~1958）：行動主義、心は刺激反応と学習の過程（S-R 心理学）。☞＜認知理論の欠如＞

サール，J（1932~）：心の哲学、心とは意識である。意識は存在論的主観性をもつ。☞＜意識の存在理由欠如＞

※ 自己啓発書（成功哲学）における心の捉え方（心の有限性の無自覚）

・ジェームズ・アレン（1864~1912）：「心の中の思いが私たちを作っている」

・ナポレオン・ヒル（1883~1970）：「思考は現実化する」「考え方があなたを変える」 ※東洋の「心」は省略

4）社会契約説と個人主義

① **資本主義は**、歴史的社会的に私有・相続され制度化された機会の不平等の中で、生来自由でも平等でもない人間諸個人を、他者の犠牲の上に勝敗が決する自由競争に追い込むことによって、人間本来の自治的精神と社会的紐帯を見失わせ、金銭的契約関係と格差拡大社会に変えてしまった。

② **近代人権思想と民主主義の限界は**、自律的市民の結合によって成立したはずの国家が、政治経済の権力者に利用され、市民社会の成熟を求めない単なる利害調整の社会制度となる傾向である。市民は与えられた人権に安住し、利己的要求の実現に走らされる大衆となり、虚栄と欲望の浪費社会に翻弄されて民主政治は形骸化し、衆愚政治に陥る可能性がある。

③ **縮小社会は、**西洋近代民主主義による閉塞状況（大衆社会）を打開し、人間の生き方や社会との主体的関わり方（自己理解による自律と連帯）の変革による「新しい契約社会」となる・・・・・。

社会契約の思想と批判

①近代の社会契約説は、自然権保護と国家権力の正当性（由来）を論じるものであった。

・ホッブス：自然権による闘争状態の終結のための絶対主義国家

・ロック：自然権保障のため「人民の信託」により国家を設立、抵抗権

・ルソー：自由平等の自然権を保障する一般意志・人民主権国家の設立

② 人権宣言

アメリカ独立宣言(1776)：万人平等、造物主による天賦の権利、革命権

フランス人権宣言(1789)：自由かつ権利において平等、所有権、抵抗権

世界人権宣言(1948)：生来的自由、尊厳と権利について平等、理性良心

③ 個人主義と基本的人権―天賦人権論への批判

・J.ベンサム：自然権は戯れ言、不消滅の権利はナンセンス、功利主義

・自然法に基づく人権と民主主義は、社会正義を「人為的に」確立しにくい。

④ 社会契約説の限界から、依存的大衆民主主義が成立

・大衆民主主義が市民社会に反知性的民族主義・全体主義を成立させた。

・形式的な自由平等は、競争経済により格差拡大と衆愚政治をもたらす。

交換的正義と分配的正義の統一

a. 自然法思想は、交換の等価性を前提として社会的富の分配法則（見えざる手）を吟味した（ケネー以来の古典経済学）。しかし、**資本主義の矛盾の顕在化**により、民主主義が進展し政府の再分配機能の正当性が追求された（福祉国家政策）。

b. 新しい社会契約では、分配的正義だけでなく、市場の透明化と公正公平、企業倫理、社会的責任、社会連帯等の**交換的正義**(win win の互恵関係)を推進することによって、利己的資本主義の拡大ではなく、自然と人間の共生共存、市場取引の互恵互助の経済のもとで福祉社会を追求する。

c. 交換的正義においては、自然法的個人主義（天賦人権）ではなく、人間が主体的・積極的に社会参加と責任を果たすという意識変化（道徳的自覚）が必要になる。

d. 交換と分配における正義の基準は、人間としての相互理解を前提とした共存共栄と互助互恵をめざし、社会的存在としての責任である格差の抑制と幸福な持続的生存に置く。

５）経済学における道徳性の欠如

①スミス・マルクス時代の本格的終焉

—自由放任（見えざる手）、経済成長の自然法則—

◇スミス『道徳感情論』と『国富論』の限界

⇒**利己的互恵主義の欺瞞性**、合理的道徳感情の楽観主義

⇒市場万能・商道徳批判の欠如、「同情」の強調、成長主義

⇒「公平観察者」が強者を代弁、社会問題を自然均衡で美化

◇マルクス理論の解放性と抑圧性

⇒解放性：唯物論・社会革命論、抑圧性：没主体性・決定論

⇒労働価値説と等価交換による剰余価値説の誤り

・資win>労win，労働力商品は労賃以上の価値がある

・労働者搾取は、交換･契約・了解過程で公然と行われる。

⇒唯物史観の誤り：人間は意識的動物である。

人間は社会的意識を創り、社会を変える。人間が資本を動かすのであって、資本が人間を動かすのではない。

②市場の欠陥性と交換的正義の確立（透明性と社会的責任論）

a. 完全競争の神話、市場の欺瞞性・欠陥性

・等価交換は、売買当事者間の「情報と資財の非対称性」を無視した欺瞞的神話に過ぎない。（需給や価格は操作可能）

b. 格差の根源は、不等価関係の集積である

・交換における**利己的公益主義の欺瞞性**は、利己性と社会性の

自覚（社会的責任論）によって**道徳的互恵主義**となる。

c. 交換的正義の可能性

・交換強者（情報と資財の優位者）の歴史的社会的責任の自覚が正義を実現する（企業・労組指導者等の社会的責任）。

d. 分配と再分配の発想は、交換的不正義を隠蔽する

・古典派・新古典派の分配・需給理論は、自由放任・見えざる手・成長信仰 等の市場調整・均衡理論の誤りに由来する。

③ 互恵的（win win）契約における winA>winB という欺瞞的等価性

a. 市場の競争的交換は、欺瞞性を伴う

・競争市場における商品売買は、交換契約の対等性（民法的契約論理）から経済学的に分析すれば、**互恵的に（winwin）契約が成立**しているとされます。しかし、その実質内容（実体性）は、当事者間でいかに合理的で公正な取引をしようとしても、必ずしも winA=winB とはならず、winA>winB（商品 A≠商品 B）の場合が常態となります。

b. 格差の根源は、不等価交換の集積である

・情報と資財の非対称性が大きい商品（中古車や保険・金融商品等）、価値の変動が激しく不透明性が強い株式商品、個人の能力や力関係が反映する労働力商品、独占企業による排他的商品等は、互恵性の内容が著しく不公正になる。ここに**市場交換の不等価性と格差の根源**が秘められています。

④ 政府の役割と分配的正義の再検討（互助互恵の交換的正義のために）

a. 分配的正義は要求的正義

・分配的正義は、市場経済の格差是正や社会福祉に貢献するが、ﾊﾟﾝとｻｰｶｽを求める**要求的正義**に陥りやすい。

b. 縮小社会における福祉国家の在り方

・交換的正義と分配的正義の統一（人類共同体・互恵互助）

・高福祉のための交換的正義と高負担（市民的利害調整）

c. 市民社会の自由と制約

・官僚制福祉主義から自治的民主的福祉主義へ（自律自助）

・諸個人の人類的自覚による自律 連帯の共同体（互恵互助）

d. 政府・公共の再分配政策（課税と福祉）の原則

・負担と受益の公平性は、市民社会の格差縮小が必要 条件

８）おわりに・・・イデオロギーの復興と縮小社会の人間の成長

◇ 未来への希望—悠久の自然と共に　◇　人間の心は宗教を求め創る

◇ 人間をよく知れば、人間はもっと成長できる